



マリリン・モンロー・ノー・リターン

昭和四十七年四月五日 第一刷

著者 野坂昭如

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号 一〇二

電話 東京03二六五局一二二一

振替 東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 五八〇円

万一落丁・乱丁の場合は
お取替えいたします。

目次

マリリン・モンロー・ノー・リターン	5
水の縁し	67
旅の終り	117
トテチテタ!	167
万婦如夜叉	201
不能の姦	235
純白の妄想 (あとがき)	291

マリリン・モンロー・ノー・リターン

装幀・横尾忠則

マリリン・モンロー・ノー・リターン

農地解放までは、バスで二時間の距離にあるN市へ、他人の土地を踏まずに行けたという大地主、しかも一毛作とはいえ日本屈指の米どころだから、屋敷のかましも豪壮なもので、まず二丁四方はある縄張りに、近くの川から水引いて濠をめぐらせ、瓦いただいた土塀も重厚なら、年中あかずの正門は二層になっていて、まずは城郭まがい。戦後、財産税の対策に母屋を民俗博物館とし、家族は離れに移り住んだが、田畑人手に渡しても、広大な山林は残って、当主ははじめ子沢山のすべて優雅に暮し、この旧家は明治以後、長男は必ず外国に遊学させるしきたりで、現在も一人がニューヨークに滞在中、そして当主はケンブリッジ大学の出身だった。

いわば地方文化人で、その名前は雄二も聞いていたが、会うのははじめて、N市ならばシベリアからの強風に吹きとばされ、あまり雪はつもらないのに、ここまで入ると膝まで没し、兄が軍隊から持ち帰った兎毛皮つきの長靴をはいていても、爪先きが冷たいというよりいたむ。紹介状

一通を頼りに、雄二が旧地主に面会求めたのは、その檀那寺である栄隆寺にしばらく置いて貰いたいからで、置いて貰うというのも妙だが、修行を名乗るほどの決意はないし、といって居候を頼みこむ筋合いでもない。

東京で食いつめ、それもすべて身から出た錆、誰を恨む筋合いのものでもないのだが、今さら家へ帰りもならず、といって都にとどまれば、まさか斬り取り強盗犯すほどの度胸はないが、詐欺窃盗くらい仕出かしかねぬ。そもそも寺にでも入るかと考えついたのは、ただもう自分を取りまく環境から逃げ出したいだけ。そして、そんなうまい先き行きを考えつかぬまま、講談本によると、昔の腕白坊主はよく寺に預けられたらしい、どこかに年老いた住職一人細々と仏守る寺はないものかと夢想し、そのきっかけは、愚にもつかぬタクシー乗り逃げを仕出かしたためなのだ。

新宿で、女のボン引きに声をかけられ、どうみても雄二、金のありそうな風体には見えぬから、あるいは先方も新米だったのか、「素人の娘さんどうですか、川口の工場に勤めてたんですけど、潰れてしまって」バスを待つ雄二の後でぼそぼそつぶやき、はじめ聞き流していたが、ふと「年いくつ」たずねたら「十八です、まだほんとに初心で」商談成立したように歩きはじめ、「二幸」の裏のくらがりきさい、雄二酔っていたから、引き合わされた女の、はたして十八であるか、初心なのか見分けるにまでいたらず、ただ、ひどく痩せぎすなことだけ認めて、うつむき加減のそのうなじに、好奇心より、憐れさが先き立った。

「三千円いただきたいんですけど」花園町ならショートで三百円だから、街娼としては法外な値段も、逆に素人娘を印象づけ、「今ないけど、信濃町まで来れば、何とかなる」「結構です」女を抱く気より、ここで後にひいては男がすたるように思つて、タクシーを拾い、信濃町には土建屋営む親戚がいた。

八方借り倒して、いずれにも顔向けできぬ雄二だったが、ごめん下さいと伯父やら母方の遠い親戚の門をくぐり、父の羽振りがよかったから、先方もまずいやな顔はしないで、時候の挨拶、家族の近況たずねるその鼻先きに「済いませんが五百円貸して下さい」びしゃりとぶつけ、すると、相手は確かに鼻白むという形容がぴたりと合うような、一瞬上の空で、「まあ、お茶をいっぱい召し上れ」や、また、自らの甘さを顧みるのか、唇ゆがめて無理な笑いを浮かべ、自虐的というほどのことでもないが、雄二この時に一種の充実感を覚える。

といっても、借金がうれしくて、いそいそ訪れるわけでは毛頭なく、かなり勇氣ふり立ててのことだが、いったん顔合わせてしまうと、手にする金よりも、のっぴきならずたたみかけるその申しこみ、時には断られることもあったが、決して引き下らず、五百円を十円にまで値下げしても、必ず果たすその過程を、たのしむ気味があった。もちろん、後始末は父や母が行なったし、そのたび、手紙できびしく叱責されたけれど、尻ぬぐい済んだとわかれば、あたらしくその権利与えられたようにさえ思えるのだ。信濃町も、そうした一軒で、ここは商売柄、大口を持ち

こめる。「体売って金もうけても、ろくなことないよ」自分を棚に上げて、タクシーの車中、雄二は説教めいたことを口にし、二人は小さい答えぬ、あるいはどこへ連れていかれるかと、怯えていたのかも知れない。

土建屋には雄二より三つ年上、同じ大学の専門部を出た息子がいたから、授業料払わねば、試験受けられぬと、見えすいた口実で申しこみ、応待に出た息子は酔っていて、「まあ上っていっぱい飲んでいけよ」上機嫌にいうのを、いかにも試験ひかえた学生風にとりつくろって、金だけ受けとり、さてタクシーにもどると、「別に寝なくともいいんだ、このお金上げるから、お茶でも飲んで別れよう。それで、気が向いたらよくここにいろから連絡してくれ。また力になれるかも知れないし」ひどくいきがったのは、くらくてよくわからぬが相変らずうつむいたまま一言もしゃべらぬ女、いかにも素人風で、これは倒産に間ちがいない、きつと幼い弟や妹を抱え、病父みとりつつのあげくだろうと、勝手に決めこみ、新宿に向かってタクシー走らせ、やれ勤め口を世話しようやら、それだけの器量なら喫茶店に働いてもいいんじゃないか、衣裳は月賦で求めれば大丈夫と幼い世智をひけらかし、相変らず無言のままの二人、乗ったところで一緒に降り、まるで親代りの如く、「どっかで、御飯でも食べようか」、借りた金の他に八百円のゆとりがあった。「でもあの、さしせまってこれを渡さなければならぬものですから」ポン引きが後で考えれば、妙に引きつっていた表情でいい、「じゃ、よくここにいろ」バス停留所のそばに雄二突っ

立ち、「聚楽」の横に消えた二人の後姿眼で追い、窮地救われた女、礼をいいに下宿へ来るかも知れぬ、その先き世帯持つまでは考えないが、恋愛めいた事態の推移を思い浮かべ、しかし、二人はそれなりけりで、ついにあらわれなかった。

謀られたと気づけば、その言動の節々、不審な点があったとあれこれ推理したって後の祭り、消えたあたりたずねてみても、らちはあかぬと、これははっきりわかつて、半ば無意識でタクシ―をとめ、青山の下宿に向かい、降りる時、三千円の腹いせに、乗り逃げしたのだ。「すぐ来るから待っててくれ」いい置いて、そのつもりなら自分の下宿へなど入らなければいいのに、部屋へ隠れ、だが勘働かせた運転手見守っていて、すぐ声を荒らげ戸口まで車を寄せ、雄二仰天し、屋根伝いに逃げたのだ。タクシ―の乗り逃げが強盗に準ずる扱い受けるとは露知らず、その夜は高田馬場近く、同じように大学五年で卒業の目途つかぬ級友の、三疊の間に泊り、翌朝さすがに氣掛りで、様子伺いを頼み、なにかが三百円足らずの料金、運転手もあきらめたるうし、下宿の誰かれどうにかとりつくろったにちがいない、ふだんならどちらかというと取越苦労、悪く悪く考えて、そうすれば逆にいい結果がもたらされるだろうと、これは癖だったのに、この時は、運転手のすさまじい怒声や、隣家の庭にとびこみ犬に吠えられ、いかにも凶状持ち風に追い立てられたことを思えば、そのゆとりはなかった。

案の定、「おれごとなんだか大事になってるらしいよ。刑事は張りこんでるっていうし、乗り逃げだけじ

やないんだなあ」つまり、隣家に家宅侵入した罪状が加わり、運転手百十番にかけたから非常線が張られ、その面子にかけてもと警察はいきり立っているらしい。もちろん、下宿の主人にたずねて素姓は明らかにされているし、素直に自首すればよし、でなければ家と大学に連絡する旨、刑事がいったという。

「これはまあ破廉恥罪だから、除籍処分かなあ」級友が、うんざりいい、どうせ何年かかっても卒業は覚束ないのだからかまわぬが、家に通知されるのは困る、さんざ不孝のありったけ仕出かしたにしろ、乗り逃げは体裁悪すぎて、「自首って、どうするんだ」「どうも、ただ申し訳ありませんてんじゃ、能がなさ過ぎるねえ、誰か警察に顔のきく人を知らないか、あれは一本電話かけといて貰うと、ずい分ちがうれしい」級友わけ知りにいい、さて思いめぐらせても、心あたりは皆目ない。

「まあいいや、まさか送検てことにはならないだろう、運ちゃんと示談にすれば」雄二強いて平静を装い、警察沙汰になったのはこれからはじめてではなかったから、多寡くる気がないでもないのだが、一方では、「大学生、タクシー乗り逃げ」と、別に珍らしくもない新聞三面の見出しが浮かび、父はN市の名士だからたちまち威信失墜するだろう、それがどうした、開き直ろうとしても、つい膝が小刻みに震える。

結局、高校の先輩に頼みこみ、さらに何期か上の、総理府に勤める男が、同級の検事に声をか

けてくれ、根まわし万端整えた上で所轄署に出頭したのだが、冬の最中というのに借物で寸たらずの学生服素脚に下駄ばき、「なんだ、ノビカタタキか」次席にのっけに詰問され、「乗り逃げです」せめて心証よくしようと子供っぽく答え、我ながら情けなかった。

大学の、まして文学部など、まともに出席する奴は馬鹿と決めこんで、また焼跡の残るうちは、なにもピーナッツ宝くじ売らずとも、結構稼ぎがあり、酒と女にこと欠かなかったのだが、朝鮮戦争落着以後、世間一般は旧に復したが、いんちきななりわい日一日と逼迫し、気がつけば教室でこそ顔を合わさね、麻雀屋外食券食堂で同級生の卒論談義や就職見こみなど、否応なく耳に入り、混乱はおさまっても不景気にちがいがなくて、けちな勤め口に眼の色変えるさまを、強いて軽んじ、さて景氣つげに焼酎あおりたくても、もはや、それすらありつげぬ。

同じような立場の耐連れ女郎買い仲間も、同級生のほとんど卒業してしまうと、妙に苛立って、教職課程の受講を申しこみ、てんから馬鹿にしていた体育の補修授業を受け、それはまだ雄二にくらべ、いくらからでも単位修得数があつたからで、雄二ときたら、四年在学して三十六単位、いまさらどうあがいたってはじまらぬ。一人とり残される心細さから、別だん小説も書かず同人雑誌に参加したこともないくせに、無頼派を氣どって飲み逃げやら、縁を頼って七とこ寸借、教室へ出た友人の留守をうかがい本を盗み、折よく書留が来れば着服し、これまでも似たような所業やりはしたのだが、めっきり陰惨な色合いとなって、折角、卒論準備のため買いそろえた原書売

り払われれば、互いに盟友と心許し合ったはずの男が、雄二の母に直訴し、以後見切りつけて一宿一飯の恩さえ分かち与えぬ。

その果ての、乗り逃げだから、表沙汰にならず落着いたものの、広い東京すべて針のむしろに思え、考えあぐねての寺入り。これとて、見ず知らずの修行寺に、頼もうとまかり出る勇氣はなく、高校時代の同級生に寺の息子がいて、「坊主は気楽だよ、仏さん扱ったって、もう棺桶へ入ってんだし、ごによごによ手前にもわかんないお経上げてりゃ、尊敬されて金になる」かなり自ら嘲っていったのを思い出し、こっそりN市へ舞いもどると、頼みこんだのだ。それもまさか食いつめてとはいえぬから、「最近、フロイトを読んでるんだが、精神分析と禅というのはかなり似ているように思えるなあ」聞きつかじりのはったりをかまし、もし費用がいるなら、父に出してもらう、しかるべく修行させてくれる禅寺のあてはないかと切り出した。

同級生は、雄二の父の地位心得ていたし、また東京での悪業は聞いてなく、すぐ父の住職にとりついでくれ、「そりゃ、春になってからの方がよろしい、冬はきびしいから」と、その辛酸のあれこれ説明したが、実は雄二、世の中に雨露しのげて三食恵まれるなら、犬小屋橋の下でも御の字の気持。国ぎかいの山中に、かなり俗界とかかわりが深く、教育委員選挙管理委員などの肩書きを持つ和尚の僧堂があり、環境からいえばここが一番、県内では他にN市から四十キロ離れた栄隆寺、この寺は住職の資格与えるいわば学校で、修行という面では少し欠けるかも知れぬ、

つまり親代々の寺世襲する子弟が、寄り集うのだから、心底禪をきわめる性根には欠けると、説明されて、雄二、いっそ武蔵ではないが、その山中の僧堂に入ってきびしく自らを鍛える、ふだんひどく自堕落なくせに、いや、その故にか、戒律に縛られた生活を、時に憧れる癖があり、「折角、御紹介いただけるのでしたら、やはりとことんまで自分を試してみるといいですか」必ずしも強がりばかりではなくいった。雄二自身ほとほと、わが意志の薄弱さ、あるいは酒に溺れる日々に愛想つかして、それは決して二日酔いの間だけではなく、このままずるずる齢を重ねて、果たして一人前に世渡りできるものなのか、しみじみおそろしくなることがあった。求人広告を見渡しても、適応する年齢資格の職種は、パーテンダー、ガソリンスタンド従業員、正体不明の各種外務員の他は、屋台売り子募集や、肉体労働で、ともに卒業した連中ですら、業界誌記者か、区会議員の伝記ライター、国もとへもどり中学英語教師になった男が、うらやましがられているのだ。

もとより坊主になる気はない、ただ、八方ふさがりの東京を脱け出し、といって、家へおめめ帰りもならぬ、いわば腰かけで、しかるべき時機見はからい、禪寺で修行する旨両親に知らせれば、少しは愛想づかしもおさまるだろうと、まだ眼鼻もつかぬうち、その文面を考えたりのだが、やがて、酒を持てなされ、雄二の真意まったく知らぬまま、修行のなにやかや物語る住職に聞き入るうち、さらに寺にさえ入れば、天晴れ人間改造ができるような気がして来る。「鎌